



Title	『百人一首梓弓』の転写過程における一問題：無窮会神習文庫蔵本をめぐって
Author(s)	永田, 信也
Citation	語学文学, 33: 5-12
Issue Date	1995
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8377">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8377</a>
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

# 『百人一首梓弓』の転写過程における一問題

——無窮会神習文庫蔵本をめぐって——

永田信也

## 一 はじめに

現在、比較的容易に見られる『百人一首梓弓』は、本居豊穎校訂『本居全集第六』（明治三六年二月五日）以下、活字本又は活と略称）所収のものであらう。しかし、この本は誤りと思はれる部分が多く、跡見学園短期大学図書館蔵本（以下、跡見本又は跡）と比較することによつて、その誤りのほとんどを訂正することが出来ることは、以前述べたことがある。<sup>(注1)</sup>だが、この誤りが底本によるものか、誤植によるものかは分明ではなかつた。活字本の性格を知るうえで、このことは重要であらう。今回、無窮会神習文庫蔵本（以下、神習本又は神）を写真によつて比較したところ、活字本との関係が深いことが判明した。神習本によれば、活字本の誤りへの過程が判然とするものが多いのである。

以下、このことについて述べていくことにするが、その前に諸本について簡単に記しておく。括弧内は略称である。

峯梯本居大平附箋本（附箋本）

都立図書館蔵

百人一首あつさ弓（鈴屋本）

本居記念館蔵

峯梯羽田野敬雄書入本（羽田野本）

豊橋市立図書館蔵

百人一首新訳（新訳）

西尾市立図書館岩瀬文庫蔵

同（本居永平写）

東大本居文庫蔵

本居清島写本（清島本）

東大本居文庫蔵

本居永平写本（永平本）

東大本居文庫蔵

諸本の詳しいことは拙稿に譲るが、<sup>(注2)</sup>その後判明したことも含めて簡単に述べておくと、俗言解の比較から右記十本は、四グループに分けることが出来る。第一は附箋本で、これ一本だけでひとつのグループをなす。第二は、鈴屋本と永平本。第三は、羽田野本と清島本と新訳。第四は、跡見本と神習本と活字本である。なほ、新訳は二種あるが、永平写本は下巻のみが残てゐるやうである。また、岩瀬本と比較したところ、この二本間にほとんど異同が見られなかつた。本稿では、岩瀬文庫蔵本によることにする。

## 二 本文の部について

俗言解の部分以外を本文の部と称することにしているが、本文の部と俗言解の部の両方を持つた完本は、鈴屋本、永平本、跡見本、神習本、活字本それに新訳である。このうち新訳は、俗言解は「梓弓」であるが、それ以外は中山豊村が「峯梯」や「初学」などを参考に、独自に編纂したもので、ここでは比較の対象にならない。

又、跡見本の本文の部については調査が不十分なので、本稿では取り掲げない。よつてこゝでは神習本と活字本を中心に、鈴屋本と永平本を参考として比較していくことにする。

誤りと思はれるものにも、いくつかの型があるやうであるが、まづ活字本で誤りをそのまま踏襲したと思はれる例を掲げる。

六番歌 神 夜いたくふけてゆうくりもなく

右は参考に引かれた「大和物語」の一節であるが、「ゆうくりも」は活字本でも同じである。鈴屋本・永平本（以下、この二本を他本と称することがある）では、「ゆくりもなく」とある。

一二番歌 神・活 挙神五変故謂之五節

他本「神」が「袖」とあるが、これが正しい。

一四番歌 神・活・摺衣のもたれたる模様

他本「スリ衣の乱レタル模様」とある。活字本が忠実に翻字した為と考へられる例である。

一五番歌 神・活 ありし事にても源氏物語

他本「ありし事にてもあるへし源氏物語」とあつて、本来この形であつたと思はれる。

一五番歌 神・活 右の御哥遍昭僧正に賀をたまひたる

これも他本「僧正遍昭」が普通であらう。

二三番歌 神・活 古今序細泣

神習本は「注」のつもりで書いたものと思はれるが、「泣」としか読めない。他本は「注」とある。

三五番歌 神・活 初瀬にまうつるかとに

他本「初瀬にまうつることに」とあつて、これでは意味が通じない。

五一番歌 神・活 母にはしめてつかはしける

これは五一番歌の詞書であるが、他本「女」とあるやうに、「母」ではいかにもをかしいのであるが、神習本では明らかに「母」とあるのである。

五二番歌 神・活 けふさへにくれさしかやとは

他本「くれさらめやはと」とあつて、これなら意味が通じるが、右の文では全く意味が通じない。

五四番歌 神・活 従三位遺子ト云

他本「貴子」とあつて、これが正しい名前であらう。

六〇番歌 神・活 またふみも見ぬ天のはし立

これも他本「見す」のやうにあるべきであらうが、神習本は「ぬ」としか読めない。

六一番歌 神・活 ワリナキ文衆ナリ

「文衆」ではをかしいのであつて、他本のやうに「大衆」とあるべきである。なほ、この部分、活字本は平仮名であつて、活字本が直接神習本によつたものでないことを思はせる。

六九番歌 神・活 三室の山の紅葉はつつたの

七四番歌 神・活 はつせの山おろしはけしかれとは

右二例は他本「もみち葉ハたつ田の」「山おろしよ」とあるやうに「は」及び「よ」の脱落したものである。ただ、神習本では「ハ」が補入されてゐる。

九五番歌 神・活 法華法師品二樂王當知

他本「藥王」とある。なほ、活字本には「法師品々」とあつて、「二」を「々」に読み違へてゐる。

次に、活字本が底本を改変或いは訂正したかと思はれる例を掲げる。

一三番歌 神 綏子内親王(欠)てつりととの、

活 綏子内親王居たまひしかはつりととの、

右の例では鈴屋本「綏子内親王にゆつらせ玉へるによりてつりととの、」のやうにあれば、神習本の「て」に続くのであるが、活字本では続かない。活字本がこの文を何によつて補つたかは不明である。他の諸本によつても同文は見出せない。

四一番歌 神 哥奉れと届あるに

活 歌奉れとあるに

この例では他本に「哥奉れと召あるに」とあるやうに、「召」が正しいのであるが、神習本では「召」の「口」が「田」になつてゐる。見ようによつては「有」にも見える字である。つまり、衍字として活字本或いはその底本で省略したものと考へられる。

五三番歌 神(欠) 将道綱母

活 右近大將道綱母

神習本では「右大」が抜けてゐるのであるが、活字本の「右近大將」

と云ふのをかしいのであつて、校訂者の本居豊頼ほどの人物がこのやうな誤りを犯すとは考へにくいので、これも活字本の底本で既に誤つてゐたのではないかと思はれる。

五八番歌 神 ゐなのさゝはら風ふれは

活 ゐなのさゝはら風ふけは

この例は説明するまでもなからうが、神習本はどう見ても「れ」にしか見えない。神習本の書写態度がいかに杜撰なものであるかの一例として掲げておく。

六二番歌 神 秋をこめて鳥のそらねは

活 夜秋をこめて鳥のそらねは

これも神習本は「秋」としか読めない字である。

六三番歌 神 人にしのひてハよひける

活 人にしのびてよはひける

これも他本「通ひける」が正しいのであるが、この二例など書写者或いは校訂者の苦勞がしのばれる例である。

次に、活字本で読み違ひをしたかと思はれる例を掲げる。

二三番歌 活 是貞のみこの家の哥合の題

「題」は「歌」とあるべきものであるが、神習本はかなり崩れた字ではあるが、「歌」と読めないことはない。

四五番歌 活 かくてのみわか思ひてのやま

この例は、「みつね集に物の名 比良の山」として引かれた歌であるから「思ひらのやま」でなければならぬ。たしかに神習本は「て」とも読めさうであるが、その前後の字からして「ら」と読める。

五一番歌 活 まで双紙

これは「まくら双紙」であるが、神習本では「くら」が続けられ、且つ上下がつぶれてゐるので「て」のやうに見える。

六〇番歌 活 つほねのかたに待りて来て

これは「まうて来て」が正しいのであるが、神習本では「ま」の字母「満」が崩れて「待」にも見える。又、「う」も「り」とも読める字になつてゐる。

六〇番歌 活 使はまして来すや

これは「まうて」が正しいのであるが、神習本は「し」にしては短すぎるやうである。

六一番歌 活 輔親の娘なそ歌よむらんと

この例では神習本は「娘ナリ」とあるが、「リ」を「ソ」と誤つて平仮名に直したものであらう。

六九番歌 活 御拾遺集秋下

右の例などは、活字本だけを見てゐる限りでは単にひどい誤植としか思へないものであるが、これも底本に忠実であつた為の誤りと思はれる。神習本では「俊」の字の偏を「イ」にしたやうな字になつてゐる。これから直接「御」にならないかと思はれるが、底本ではさらに「御」の字に近くなつてゐたものであらう。

以上、本文の部を考察して来たが、これからすると複数の本をみてゐるやうには思はれないが、ただ次のやうな例もある。

五三番歌 神 といひて待りければ

活 といひいれて待りければ

右の例で、永平本「といひ入て待りければ」鈴屋本「といひて待りければ」とあつて、二系統の本文があつたことが分かるのである。

これからすると活字本或いはその底本が他にも参照した本があつたと思はれるが、それにしてもその依存度は小さかつたと思はれる。

### 三 俗言解の部

まづ、誤りを踏襲したと思はれる例から掲げる。

二番歌 神・活 ハレヤカノヨイ天気デ

跡見本は「ハレヤカナ」とある。

一二番歌 神・活 トゞメテクレイヨ

跡見本では「トゞメテクレヨ」の「ヨ」の右に「イ」が傍書されてゐる。なほ、他の諸本で参考に来るものはない。

一四番歌 神・活 外へ心のチラサウゾ

跡見本は「心ヲ」とある。

一六番歌 神・活 ツノ国のイナバノ山ノ

跡見本は「ソノ国」とある。

一八番歌 神・活 ヨケルヤウミルノハ

跡見本「ヨケルヤウニミルノハ」とあるやうに「ニ」が脱落したものをそのまま踏襲したものである。

一九番歌 神・活 云コトカサテモノ（神「コト」は合字であるが単字に改めた）

二二番歌 神・活 サテモノ、

右二例はいづれも踊字であるが、一九番歌では踊字の下の部分が無く、二二番歌では誰れてゐる為にそれぞれ「ノ」「ノ、」となつてしまつた訳である。なほ、同例は五九番歌にもある。

二〇番歌 活 中デアツタ題シテ

この例は跡見本に「中デアツタニ顕レテ」とあるのが正しいが、神習本で「ニ」を脱落し、「顕」も「題」としか読めないやうな崩れた字になつてゐる。

二〇番歌 神・活 身ヲシマウテサリトモ  
神習本は明らかに「サ」とあるが、他の諸本総て「ナ」とある。

以下、紙幅の都合上用例のみを掲げ、該当箇所には括弧で跡見本を掲げることにする。

- 二六番歌 紅葉ヲ(ヨ)コリヤ
- 三五番歌 ソシタン(ラ)ハソノ家ノ
- 三五番歌 アルソヤ(ト)口上デ
- 三六番歌 マダヨヒノマデア(フ)ケルマモナシニ
- 四〇番歌 物思ノ(ヲ)ナサルサウナ
- 四六番歌 漕ヨセハ(ル)為方モナイ
- 五五番歌 名(ハ)今(ニ)伝リテ
- 五六番歌 恋シ(イ)御方ニモ(神はイの部分一字あき)
- 五七番歌 友ダチ(ニ)今宵
- 五七番歌 思フテ居ルウチモ(ニ)
- 五八番歌 云オフ(コ)サル、ニハ
- 五九番歌 今宵ニ(ハ)必ト
- 六〇番歌 母ノ詠シ(ン)テクレルモノト
- 六〇番歌 天の橋立トタトウ(イフ)
- 六〇番歌 遠イ国ナル(レ)ハ
- 六三番歌 モウハイツウ(ソ)トヤカク
- 六六番歌 山中ハ(ヘ)来テハ

六七番歌 忠家ワ(卿)カ御廉ノ下カラ

六九番歌 嵐カ吹ナ(チ)ラシテ

七三番歌 楽マヲ(ウ)ト

七五番歌 真(其)カネテ御約束

八九番歌 心ツカヒヲ(ニ)身モ

百番歌 マルテ(ニ)アラサレトモ

次に、改変或いは訂正したかと思はれる例を掲げる。

一一番歌 活 島ヲスギテ

この例では跡見本は「島々」とあるが、神習本では「島マ」のやうになつてゐて、それで活字本では略したものと思はれる。

二二番歌 活 アラシト云コトデアアラウ

跡見本では「云フノデ」とあり、神習本では「云コノデ」とある。

因みに俗言を持つ他の諸本は「云テ」とある。

二五番歌 活 人ニハ知ラレズシテシツカニ

この例は跡見本その他の諸本総て「ヒソカニ」とある。それを神習本が「ヒツカニ」とした為に、活字本ではこのような形にしてしまつたものである。

三八番歌 活 見捨ラレタ

三八番歌 活 命ガ惜ク存ゼラレマス

右の二例は神習本では「見捨ウレタ」「惜ノ」とある。

四八番歌 活 心ヲサマノトクダケルコトカナ

「クダケル」は自動詞であるから、「心ヲ」と云ふ目的語をとれないのであるが、他の諸本総て「クダク」とある「ク」の字が神習本では一画づつ離して書いてあるので、「ケ」に見える。それで活字

本のやうな非文法的な文になつたものである。

五一番歌 活 カウトモユハネバ

右の例は一見方言か訛のやうに思へるが、他の諸本総て「エイハネハ」とあつて、打ち消しの副詞「エ」なのであるが、それを神習本で「ユイハネバ」としてしまつた為に活字本のやうになつてしまつた訳である。

五四番歌 活 オタノモシウ

右の例では、神習本「ホタノモシウ」とあつて、これでは文意が通じないので、最も近い片仮名の「オ」にしたものであらう。しかし、これは他の諸本総て「末タノモシウ」とあるやうに、「末」の第一画を書かなかつた為に「ホ」になつてしまつたものである。

五八番歌 活 ヨリ付モセヌ人ヨリ却テ

この例では跡見本「人の却テ」とあるが、神習本では「ノ」が「リ」のやうに見える。その為に活字本では「ヨリ」としてしまつたものであらう。

八八番歌 活 命をすこす

この例では、附箋本は「ツクス」とあるが、他の諸本は総て「スクス」とある。神習本は「スガス」とあつてこれでは意味が通じないので、「ゴ」と認定したものであらう。

百番歌 活 朝政ノオトロヘタル

これは他の諸本総て「朝威」とあるが、神習本では「朝成」とあつて、その為に「政」にしたものであらう。

次に、活字本の読み違ひかと思はれるものを掲げる。

七番歌 活 出た月しやわ山とよみてかさりなき

これは跡見本「出た月しやわいとよみてかさりなき」とあるのが正しいのであるが、跡見本は「しやわ」の次が「止」の崩れたやうな字になつてゐる。それを「山」としてしまつたものであらう。しかし、活字本では全く意味が通じない。

一〇番歌 活 名の附とある所ぢや

神習本「附て」の「て」が、「と」とも「て」とも読める。

二二晩歌 活 シヨレ、バ花の事ジャワ

これは神習本「尤ノ」で「花」とは読まない。ただし、他本「尤ノ」とある。

三四番歌 活 今デハコウ同シコロアヒノ

この例では跡見本は「マア」神習本は「マウ」とある。

三五番歌 活 出シマシテユサレハ

四九番歌 活 胸ノ思フ火ガ

五〇番歌 活 逢シサへ

五三番歌 活 思シ召スワイ

右の例では、それぞれ「コサレハ」「思ノ」「逢レ」「ソイ」が正しい。

五七番歌 活 巡リアフト云々

五八番歌 活 何レノタヨリモ

六六番歌 活 モトヨリテ近ク

これらの例も「云ニ」「何ンノ」「ケ近ク」が正しい。

六七番歌 活 詠マレタ人腕ヲ

この例では、神習本は「詠マシタ人腕ヲ」とある。正しくは跡見本のやうに「詠マシタ人ノ腕ヲ」とあるべきである。

六八番歌 活 出サルニテ

この例は「出サルゝテ」の踊字を「ニ」に誤つたものである。

七八番歌 活 夜の寒ク折カラ

神習本は「ク」とも読めるが、「イ」により近い字である。

八五番歌 活 思フヤウニ成テクレタノカツレナイ

他本総て「クレヌノカ」とあり、神習本も「ヌ」である。「クレタ」でも文脈上でもおかしい。見える通り忠実に写すと云つてもこれでは改悪としか云ひやうがない。

八七番歌 活 マシキリ降タ

この例は神習本で「一シキリ」の「シ」の第一画が水平になつてゐて「マレキリ」のやうに見える為の誤りである。

八八番歌 活 水派に串

これは「水派ツ串」であるが、神習本は「ワ」のやうな字になつてゐる。

九〇番歌 活 袖ハヌレノニ

跡見本と神習本は「ヌレノテ」とあり、他の本は総て「ヌレテノ」とある。

九五番歌 活 万民ニ袖ヲオホクト

この例も他の本総て「オホフト」とある。

次に、活字本独自の文を持つ例を掲げる。

三五番歌 活 前々のカラノトホリノ匂ヒニ

他の本の総て「前方」「マヘカタ」とある。

四二番歌 活 有ツタゾイヨウ

他の本総て「ナア」であつて、「ヨウ」の形は見られない。

四九番歌 活 夜ハ御所ニテカドリ火を焼ク

この例も他の本は総て「所々テ」とある。

五六番歌 活 死ヌカト思ヘバ

他の本総て「死ウカト思ヘバ」とあり、神習本も「ヌ」には見えない。

五八番歌 活 ソレデコウ詠シテヤツタ

他の本総て「カウ詠ンテ」とある。ただし、神習本は「カウ詠シテ」と「ン」が「シ」に見える。

六〇番歌 活 御ブリナサル、

他の本総て「御ナブリ」とあり、神習本は「御ナゴリ」に見える。単に活字本の脱落とも考へられる。

六五番歌 活 イカニモ惜イイワナ

この例では、羽田野本のみ「惜イワイ」とあるが、他の本は総て「惜イワイナ」とある。

八八番歌 活 仮寝と云も芦の

これは「カリネト云モ一夜ト云モ」の「一夜ト云モ」が脱落したものと思はれる。

八九番歌 活 コトハダンダンヨワラ——ウモシレヌ

これは跡見本のやうに「忍コトハヨワツテ頭ハル、ヤウニナラウモシレヌ」とあるべき所で、他の本も総てかうなつてゐる。ただ、神習本は「忍フコトハ(欠)ウモシレヌ」と空白になつてゐる。

恐らくは、活字本で独自に補はうとして補ひきれなかつたものでもあらう。

九九番歌 活 朝廷ノ裏ヘユクコトヲ

この例も、これでは文意が通じない。他の本のやうに「衰ヘ」でなければならぬ。ただ、神習本では「上」の下が「皿」の字のやう



になつてゐて、その為に誤つたものであらう。

最後に、跡見本のみが異なる例を掲げる。

五七番歌 跡 ホンニ逢タカアハナシダカト

これは他の本総て「ホンノ」とある。

五九番歌 跡 月モ傾クコロマデ

永平本のみ「月傾」とあるが、他の本は総て「月ノ」とある。

六四番歌 跡 綱代木ガダンノト影ハレテ

この例も田野本のやうに「顕ハレテ」とあるべきものである。この例、神習本では「グンノト影ハレテ」と一層悪くなつてゐるが、活字本では「グンノト顕ハレテ」と一部よくなつてゐる。これが他の本によつたものか、独自に訂したものは不明である。

六六番歌 跡 ソチモオレモウトカラズ

この例も他の本総て「オレヲ」とある。

六八番歌 跡 清明（傍訓マサヤカ）ナル

これも、傍訓「サヤカ」か、本文「サヤカナル」と他の本にはある。

六九番歌 跡 モミヂデハナイ立田川ノ

神習本と活字本は「コノ立田川ノ」とあり、その他の本は「此立田川ノ」とある。

八二番歌 跡 物ハ涙ヂャワイ

附箋本と清島本は跡見本と同じであるが、他の本は「物ハコノ涙ヂャワイ」と「コノ」が入つてゐる。

#### 四 まとめ

以上、神習本を中心に活字本の誤りと思はれるものによつて来た

ところを比較検討して来たのであるが、活字本のやうな誤りは神習本のやうな本の存在がなければ、起こり得ないと考えられる。活字本の、底本に出来るだけ忠実に翻字すると云ふ態度は評価出来るが、選んだ底本が悪過ぎた訳である。神習本は書写者が、ほとんどいや／＼ながら転写してゐると云ふ趣があつて、悪筆と云ふよりも前述したやうに杜撰なのである。例へば、「百人一首新訳」の岩瀬文庫本と永平写本は、比較してゐて面白くないほど違いがなく、行変、書体まで似てゐて、厳密な転写態度と云ふものがうかがへるのであるが、神習本においてはそのやうな態度は見られないのである。或いは全くの個人用として、自分が読めればそれでよい、と云ふことであつたかもしれない。

しかし、いづれにしても信用出来ない本文が提供されてしまったことは事実である。前述したやうに、活字本は直接に神習本によつたとは考へられず、この間に一冊或いは複数の本の存在を想定すべきであらうが、転写或いは校訂の際に参照し得る本があれば、又読みも変わつて来たものと思はれる。この意味において、さらに「梓弓」の複雑な転写過程を説明する意味でも、「梓弓」の他の本の提供を急がうと思ふ次第である。

注1 拙稿「跡見学園女子短期大学図書館蔵『百人一首梓弓』について」北海道教育大学語学文学会「語学文学」第三十一号 一九九三年

注2 拙稿「本居門下の百人一首の俗言解について（稿）」北海道教育大学語学文学会「語学文学」第二十八号一九九〇年

（旭川校）